合掌造り家屋と集落の再生

—白川郷と五箇山の事例—

Conservation of Gassho-style Houses and Villages

黒田 乃生*

Nobu KURODA

1 はじめに

「白川郷・五箇山の合掌造り集落」は1995年に世界遺産に登録された。合掌造り家屋がある岐阜県白川村荻町、富山県南砺市菅沼および相倉という3つの集落が日本の世界文化遺産ではじめて人が生活している登録資産になった。「古民家再生」という言葉には、使わなくなった伝統的な様式の家屋を修復し別の用途に転用するイメージがある。ひとつひとつの建物に対して使われる場合が多く、集落の保全とは区別して考えたほうがわかりやすい。このように考えると、一見、世界遺産の合掌造り集落に「古民家再生」という言葉は馴染まないように見える。しかし、集落の保全と歩みを同じくして建物の再生が地域内外で続けられてきた。かつて白川郷から五箇山にかけて庄川沿いに点在していた集落の家屋はほとんどが合掌造りであった。1950年から70年代にかけて合掌造り家屋が激減する中で、一部の建物や集落が「保存」によって再生し継承されてきた。そして、地域の人が継続して生活をし、集落全体が保全とともに変化して現在に至っているのである。

同じ合掌造り家屋の集落でも、白川郷と五箇山では保護制度と保存のきっかけが異なり、それが現在の「まもりかた」の違いの要因になっているともいわれている。本稿ではそのような背景もふまえて、白川郷と五箇山というふたつの事例から、合掌造り家屋と集落の再生について述べる。

2 合掌造り家屋の概要

合掌造り家屋とは、一般に叉首構造、切妻造りの茅葺きの家屋のことで、岐阜県の北西部から富山湾に流れる庄川沿いに分布していた。合掌造り家屋の巨大な屋根がなぜこのような形になったのか、その起源ははっきりしておらず、浄土真宗のあつい信仰と養蚕と雪深い地域の

特性があいまって成立したとされている。おもに江戸中期頃から1960年代まで250年にわたって白川郷と五箇山地方で建てられてきた¹⁾。

特色のひとつは軸部を大工が、小屋組みを住民がつくったところにある。屋根は2～3層になっており、かつては養蚕に利用していた。屋根の空間を広く使うために束がない叉首構造になっていて、構造的にも優れている点が世界遺産の推薦書では高く評価されている（写真1）。1階はマヤで馬を飼い、煙硝や和紙の生産は土間などで作業が行われた。現在では養蚕をしている家はなく、合掌造り家屋の屋根の部分は物置や展示スペース、部屋などに利用されている。

3 合掌造り家屋の保存の経緯

(1) 文化財指定（1950年代）

1950年代から全国に開発の波が押し寄せ、多くの民家や伝統的な集落が失われた。合掌造り家屋もこの時期からダム建設や過疎化によって数が激減した。図1は文化財指定・選定をうけていない集落の合掌造り家屋の棟数の変化である。指定や保存の動きがない集落では1950年から1970年の20年間で一気に建物が失われて

写真1 合掌造り家屋（白川村荻町、筆者撮影）

*筑波大学芸術系 Faculty of Art and Design, University of Tsukuba

Key Words：1）白川郷，2）五箇山，3）合掌造り家屋，4）世界遺産

しまったことがわかる。このような状況の中で、合掌造り家屋をめぐる3つの動きが起こった。ひとつは建物単体の重要文化財指定、二番目は集落の史跡指定と重要伝統的建造物群保存地区（以下「重伝建地区」）選定である。三番目はそれらの動きにあわせて多くの建物が地域の内外に移築・再生されたことである。

まず、単体の文化財指定について整理する。全国の民家調査の動きが背景となり、合掌造り家屋が文化財指定された（表1）。文化財の調査としては白川郷では1950年代に稲垣栄三ら研究者と文化庁、岐阜県教育委員会が合掌造り家屋の調査を実施し、文化財指定の候補を絞った²⁾。また、五箇山では1950年代に文化庁の調査が実施された³⁾。その結果、1956年から1959年の間に5棟の合掌造り家屋が重要文化財または重要有形民俗文化財に指定された。

五箇山の3棟は現在も当初の所在地にあり、村上家と岩瀬家は公開されている。指定事由をみると、羽馬家は「合掌造民家の最も古い形式をよく残している」、岩瀬家は「合掌造の最も発展した形式を示している」、村上家は「五箇山地方民家（合掌造）の最も典型的な例」とさ

図1 五箇山の世界遺産地域外の合掌造り家屋の棟数の推移
(平村史編集委員会編 (1983): 平村史下巻, p.1093より作成)

表1 合掌造り家屋関連の文化財（国指定・選定）

指定 選定年	文化財種類	元の 所在地	文化財名称	移築の有無
1956	重要文化財	白川郷	旧大戸家住宅	下呂温泉合掌村 (岐阜県下呂市)
1958	重要文化財	五箇山	羽馬家住宅	
1958	重要文化財	五箇山	岩瀬家住宅	
1958	重要文化財	五箇山	村上家住宅	
1959	重要有形民俗文化財	白川郷	民家(白川の合掌造)	日本民家集落博物館 (大阪府豊中市)
1969	重要文化財	五箇山	旧江向家住宅	日本民家園 (神奈川県川崎市)
1970	史跡	五箇山	越中五箇山菅沼集落	
1970	史跡	五箇山	越中五箇山相倉集落	
1971	重要文化財	白川郷	旧遠山家住宅	
1976	重要伝統的建造物群 保存地区	白川郷	白川村荻町	
1977	重要文化財	白川郷*	旧若山家住宅	飛騨民俗村 (岐阜県高山市)
1994	重要伝統的建造物群 保存地区	五箇山	南砺市菅沼	
1994	重要伝統的建造物群 保存地区	五箇山	南砺市相倉	
1995	重要文化財	白川郷	和田家住宅	

*旧荘川村

れ⁴⁾、網羅的な調査の後に合掌造り家屋の特徴を示す代表的な3件を指定したものと考えられる。一方、白川郷の合掌造り家屋の指定は少し事情が異なっている。文化庁建造物担当の調査時に指定の対象となっていた5戸のうち、実際に指定に至ったのは2戸のみで、そのうちの1戸は大戸家は指定後に下呂温泉合掌村に移築された⁵⁾（写真2）。唯一の民俗文化財である大牧集落にあった建物はダム水没に際して移築・指定され現在も博物館の施設として公開されている。

その後移築されたものでは旧江向家、旧若山家が指定され、白川村では旧遠山家と和田家が重要文化財に指定された。遠山家は村が管理し、和田家は「有限会社和田家」が管理し公開している。

(2) 集落の保護（1970年代）

1970年代には合掌造り家屋単体の保護から集落の保護へと対象が広がった。

白川村では住民による建物の保護が先行した。現在も保存の大きな力になっている「白川郷荻町の自然環境を守る会」（以下「守る会」）が結成されたのは1974年である。「守る会」は戦後復興した若者が郷土芸能や畜産業などを通して結びつきを強める中で合掌造りの保存を決め、妻籠の先進事例を学びながら、保存の大切さと村の将来を集落全体に説いてまわり、結実したものである。住民が自分たちで保存を決めた原動力として柿崎は「(1) 郷土芸能が育んだ若者達の団結力、ひいては集落全体の活性化、(2) 絶えず村や地区の人びとを念頭におき、山村民の生活の将来への展望に傾倒した熱意と努力、(3) 外部からの提言に触発されつつ、現状を革新する決断と行動力」の3点をあげている⁶⁾。保存を始めた中心メンバーは、集落の人が次々に合掌造りの家屋を壊したり村外に売ったりするのを、時には叱り飛ばす熱意で説得したという⁷⁾。その結果1976年には全国ではじめての「重

写真2 旧大戸家住宅
(下呂温泉合掌村、筆者撮影)

伝建地区」のひとつに選定された。

五箇山では史跡指定が先行した。「越中五箇山相倉集落」「越中五箇山菅沼集落」が史跡に指定されたのは、伝統的建造物群保存地区の制度ができる5年前の1970年である。歴史的な環境を守るために「史跡」という制度の枠組みを適用して保護の対象としたと考えられる。指定の理由は、もっとも多く合掌造り民家を残していること、煙硝製造、紙すき、養蚕製糸などの遺構がうかがわれること、雪持林や茅場等が残っていることなどがあげられている⁸⁾。史跡は「土地」を指定する制度で家屋はそれに付随するものという位置づけになるため、集落の歴史的な重要性が強調され、雪持林や茅場などに言及している点が注目される。史跡指定によって所有者による管理と復旧が義務づけられたが、1973年以降は平村と上平村が、合併後の2004年以降は南砺市が管理団体となっている⁹⁾。菅沼、相倉は世界遺産登録の際に、荻町と保護の体制を揃えるために「重伝建地区」に選定されたが、実際の保護は史跡を優先して進められている。

(3) 合掌造り家屋の移築と再生

①複数の建物の移築（地域内）

合掌造り家屋のもうひとつの特徴は、1970年代以降地域内外に移築され、現在も利用されている点にある。ダム建設と過疎で合掌造り家屋が解体される際に、多くの建物が商業用または博物館用に移築されたのである。それらは民家園などの博物館として公開されているもの、レストランや民宿として再生されたものがある。いずれも地域内外に分布している。

まず、複数の建物を地域内に集めた事例について述べる。まとめて移築されたものとして白川村にある「野外博物館合掌造り民家園」があげられる。1969年から1971年にかけて集団離村した加須良をはじめとする集落の使われなくなった白川村の合掌造り家屋10棟が移築され、総工費1億円をかけて1973年に「白川郷合掌村」としてオープンした。開村当時は10年で77万人の来訪者があり、白川郷を代表する観光名所となった。その後入り込みの減少などをうけて施設を整備し、1994年からは「野外博物館合掌造り民家園」としてリニューアルオープンした¹⁰⁾。現在も観光施設として公開されており、そのうち9棟（主屋4棟、附属建物5棟）は岐阜県の文化財に指定されている。この民家園は世界遺産地域の対岸にあり、かつての加須良の生活を伝える展示や体験学習が可能な施設となっている。

五箇山では菅沼集落の南西600mの場所に使われなくなった合掌造り家屋を移築し、1972年に「青少年旅行村・合掌の里」が開設された。現在は13棟の合掌造り

家屋に展示館「五箇山生活館」や食堂が併設され、「五箇山合掌の里」という宿泊・体験施設として利用されている¹²⁾。翌年1973年には五箇山の利賀村に合掌造りの民家5棟が移築され、「合掌文化村」（現在「富山県利賀芸術公園」）が開設された¹³⁾。演劇など様々な芸術活動の拠点として1970から80年代に注目を集めた。

②単体の建物の移築（地域内）

建物単体の移築として白川村では1970年代に白川村の他の集落から現在世界遺産の荻町へ、民宿や食堂など観光目的への転用のために11棟の合掌造り家屋が移築された¹⁴⁾。移築した建物でも、「重伝建地区」選定前に移築されたものは伝統的建造物として保護の対象になっている。重要文化財の指定の候補であった有家ヶ原集落のK家は現在世界遺産の地域内にあるレストランとして活用されている。また、加須良から1971年に荻町へと移築されたI家は、2009年の修理の際に加須良にあった頃の当初の向きと大きさを考慮して、向きを東西から南北方向に変更し新たに二間伸ばす復原を行った。その他にも合掌造り家屋の建築の記録を撮影し、白川郷技術伝承館として利用するために移築された田島家などがある。

③単体の建物の移築（地域外）

地域外への移築について正確な数は明らかではないが、重要文化財、重要民俗文化財に指定されている3棟をはじめ、多くがレストランや宿泊施設として現在も利用されている。特異な運命を辿った阿蘇市の合掌造り家屋の事例を紹介する。ネズミ請と脱税で新聞を賑わせた「天下一家の会」という団体のシンボルとして白川郷から阿蘇市に合掌造りの建物が移築されたのは1971年だった。大家族で助け合って暮らす合掌造り家屋のイメージを宗教の教えに重ねて建設されたという¹⁵⁾。その後、再度移築されて現在は宿泊施設の食堂として利用されている。また、筑波山頂には1970年代に白川村の合掌造り家屋3棟を利用して建てられたステーキレストランがあり、五箇山の合掌造り家屋の例としては1968年に八王子市に移築され「合掌造りの集落」を謳ったレストランがある。

合掌造りの建物を移築し、博物館や宿泊施設として活用した背景には、当時の民家の保存の手法を模索する動きがあると考えられる。人が生活する家屋や集落をどのように保存すればよいのかという新しい課題に対し、合掌造りの家屋がさまざまな場面で象徴的な役割を果たしたともいえる。宗教施設、レストラン、博物館等多様な活用がされ改変されながらも現在まで受け継がれているのは合掌造り家屋の価値と魅力があればこそではないだろうか。また、世界遺産の地域だけではなく日本の各地

で合掌造り家屋が使われ続けていることは重要で、全国の移築と利用状況の把握を進める必要がある。

4 新しい取組と今後の課題

白川村は2010年に白川村世界遺産マスタープランを、2013年には白川村観光基本計画を策定した。また、五箇山も2012年に南砺市五箇山世界遺産マスタープランを策定した。いずれも今後の世界遺産としての地域のありかたについて、住民との話し合いを重ねて作られた計画である。世界遺産登録から15年以上が経過し、観光の方向性や遺産の継承のしくみなど多くの課題を抱えるなかで、新しく村や地域全体の活性化を見据えた地域づくりが始まった。

合掌造り家屋は建物単体、複数、地域内、地域外と多様な形態で再生され、現在も利用されている。世界遺産の集落を核として、再生された建物が各地で生き続けていることこそ合掌造り家屋の価値であるといえる。博物館だけでなくレストランや宿泊施設などの合掌造りの建物もサテライトとして活用し、ネットワークを構築することは、合掌造り家屋の理解、ひいては世界遺産の価値を伝えることにもつながるのではないだろうか。

引用文献

- 1) 宮澤智士 (2005) : 白川郷合掌造り Q& A. 白川村・白川村教育委員会, p.9.
起源については16, 17世紀まで遡るのではないかという説もある (佐伯安一 (2009) : 合掌造り民家成立史考, 桂書房).
- 2) 稲垣栄三: 山村住居の成立根拠 (1) ~ (3), 建築史研究 (10), (12), (15), 1952-1954, 岐阜県教育委員会編 (1957) : 荘白川総合学術調査報告書上, pp.115 - 138.
- 3) 文化財保護委員会 (関野克, 伊藤延男) による『富山県五箇山民家予備調査報告』が発行され, 五箇山で45棟が調査対象となっている。(富山県教育委員会 (1970) : 富山県の民家, p.1, p.8).
- 4) 文化庁「国指定文化財等データベース」より.
<http://kunikunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp>
2013.6.30 参照.
- 5) 黒田乃生 (2007) : 世界遺産白川郷—視線のさきにあるもの. 筑波大学出版会, pp.68 - 71.
- 6) 柿崎京一 (2011) : 『守る会』結成に駆りたてた原動力はいかにして生成されたか, (白川郷荻町集落の自然環境を守る会編, 『白川郷荻町集落40年のあゆみ (白川郷荻町集落の自然環境を守る住民憲章制定・守る会結成40周年記念誌)』). 白川村教育委員会発行, p.27.
- 7) 前掲6 (白川郷荻町集落40年のあゆみ), p.30.
- 8) 文化庁「国指定文化財等データベース」より.
<http://kunikunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp>
2013.6.30 参照.
- 9) 南砺市教育委員会文化・世界遺産課・五箇山プロジェクトチーム (2012) : 南砺市五箇山世界遺産マスタープラン, p.15.
- 10) 白川村史編さん委員会 (1998) : 新編白川村史 中巻, p.530
- 11) 前掲9 (南砺市五箇山世界遺産マスタープラン), p.99.
- 12) 五箇山合掌の里 HP より.
<http://www.gokayama.jp/gassho/index.html> 2013.7.7 参照.
- 13) 富山県利賀芸術公園 HP.
<http://www.togapk.net> 2013.7.14 参照.
- 14) 前掲10 (新編白川村史 中巻), p.825.
- 15) 宗教法人大観宮 (1977) : 天下一家の会あゆみ 創始十周年記念. p.50 (阿蘇市教育委員会蔵).

Summary: "Historic Villages of Shirakawa-go and Gokayama" was inscribed on the World Heritage List in 1995. Conservation of those villages started in 1960's. Residents organized village's community association in Shirakawa-go. Ainokura and Suganuma villages in Gokayama were designated as National Historic Sites in 1970's. Many gassho-style houses were moved to both inside and outside of the area. Some of them have been used for museums, and others for restaurants. It is possible that networking all houses scattered in Japan and using them as information centers of the World Heritage Sites.

Key Words: 1) Shirakawa-go, 2) Gokayama, 3) Gassho-style houses, 4) World Heritage